

井上ひさし没後10年 記念展示によせて

宮城野区文化センター
村上 佳子



昨年は各地の文学館で、井上ひさし没後10年を記念する企画展が開催されました。本誌でもしばしば紹介させていただいた作家・劇作家の井上ひさしは、私がかつて勤務していた仙台文学館の初代館長を務め、2010年4月、満75歳で永眠いたしました。

今も続く世界的な新型コロナウイルス感染症の流行により、国内といえども移動がためられる状況もありましたが、比較的落ち着いていた時期に足を運んだ数館をご紹介します。

井上ひさしは、昭和9（1034）年に山形県川西町に生まれ、やがて家庭の事情により、中学3年から高校を卒業するまでを仙台市の孤児院「ラサール天使園」で暮らします。大学進学を機に東京に出て、卒業後は放送作家として様々な台本を手がけ、人形劇「ひよっこりひょうたん島」で世に知られるようになりました。その後は、作家・劇作家として『吉里吉里人』『父と暮せば』等をはじめ数々の作品を手がけ、今も出版や上演が続いています。

今回の企画展は、仙台文学館のほか、東京の世田谷文学館、30代から40代の頃に住んだ市川市の文学ミュージアム、50代から晩年までの住まいがある鎌倉の文学館、そして故郷の川西町フレンドリープラザ等、それぞれの切り口によるとても興味深いものでした。



各館の展示図録

仙台文学館の企画展「井上ひさしの劇列車」では、宮沢賢治、太宰治、樋口一葉、林芙美子、小林多喜二など、評伝劇に描かれた作家たちが列車のコンパートメントに仕立てられた展示室に立ち現れ、井上ひさしの言葉を通して現代の私たちに語りかけます。

…彼は息を引き取る瞬間まで祈り続けるだろう、「どうか人びとが明るく生きていくことができますように」と。賢治のこの祈りは、いまでもわたしたちを励まし、そして振り立たせずにはおかない。（「賢治の祈り」から）

世田谷文学館の「井上ひさし展—希望へ橋渡しする人」は、作家の生涯と作品を読み解くスケール感のある展示でした。小林多喜二の評伝劇「組曲虐殺」を大きく取り上げるとともに、小説や戯曲のほか憲法をめぐる著作、都市の理想を見たというイタリアのボローニャへの旅の記録、多彩なテーマのエッセイや創作の作法など、広がりや深みのある充実した展示でした。その中で、目にとまった本の読み方十箇条のひとつをご紹介します。

本はゆっくり読むと、速く読める。つまり、どんな本でも最初は、丁寧に丁寧に読んでいくんです。最初の十ページくらいはとくに丁寧に、登場人物の名前、関係などをしっかり押さえながら読んでいく。そうすると、自然に速くなるんですね。最初いいかげんに読んでいると、いつまでたってもわからないし、速くはならない。でも、本の基本的なことが頭に入ってくると、もう自然に、えっというぐらいに速く読めるようになるんです。

千葉県市川市は、昭和42（1967）年、33歳の井上ひさしが初めて自分の家を持った街です。その地で作家として精力的に仕事をし、3人の子どもたちを育てますが、20年後の離婚、翌年の再婚を機に、鎌倉に転居することになります。その転居の際に、生まれ故郷の山形県川西町に、市川市の自宅にあった蔵書が寄贈され、「遅筆堂文庫」が誕生します。地元の井上ファンの青年たちの熱意に応じて故郷での講演会を引き受けたことから、川西町と作家とのつながりは深まり、「小さな図書館」の構想のもとに7万冊の蔵書がやってくることになったのです。

現在の「遅筆堂文庫」は蔵書22万冊を数え、劇場と町立図書館を併設する複合施設「川西町フレンドリープラザ」として、町の拠点施設になっています。館内

には、井上ひさしの著作や蔵書が手に取れるように展示されており、作家の仕事の現場に入り込んだような気がして、在りし日の井上館長が偲ばれました。

最後に、井上ひさしが作詩した川西町立第一中学校の校歌の一節を紹介します。

…めあては一つ人らしき人／空よりも
こころの広さをめざして

…めあては一つ人らしき人／花よりも
心の清きをめざして

…めあては一つ人らしき人／山よりも
こころの強きをめざして

作者は、この3行が生徒諸君の記憶に残ってくれば、それでいい、と記しているとのことですが、かつての人情劇「ひょっこりひょうたん島」挿入歌の歌詞「人間らしい人間 人間になるため勉強なさい」を思い出し、未来の子もたちにこめた思いを感じました。



川西町フレンドリープラザ内「遅筆堂文庫」入り口

山形県といえば好物のお蕎麦。帰りに山形市内中心部の「御殿塚」にできた老舗蕎麦屋の支店に立ち寄りました。趣のある街並みの中で山形ならではの昼会席と美味しい更科蕎麦をいただけてきました。